生徒会長ブリーダー!!
お嬢様の超☆調教日記
ちゅっ2
Brave Breeder!! Student Council President Pet
立ち読み版
著
神楽陽子
挿絵／saxasa

第一話　生徒会長の気まぐれな日々を観察してみた　006
第二話　ナマイキな子猫はニャアではなくチュウと鳴く　045
第三話　牛の乳搾り？　お嬢様のミルキーバスタイム　084
第四話　お仕置きも愛情たっぷり！　ワガママな犬の躾け方　138
第五話　ウサギさんの騎乗位ライブに超興奮！　200
エピローグ　ボクのペットは毎日おしゃぶりに夢ちゅう　249

登場人物紹介

Characters

藤堂沙織（とうどう さおり）

T立中央学院の二年生で、同学院の生徒会長。高圧的な態度やキツい言動が自分のイメージを悪くしていることに悩んでおり、そんなイメージを変えようと秀平に交際を命じる。

帝塚山秀平（てづかやま しゅうへい）

動物好きなT立中央学院の一年生。生徒会で役員を務めている事が縁で、沙織の観察日記をつけさせられることに。

先端を優しく噛むと、沙織の手に一瞬だけ力が入った。芳醇なにおいが湯気とともに充満し、ふたりきりのムードを盛り上げる。

いつの間にかブラジャーは右も左もずれ、桜色の乳芽をつんと勃てていた。少年の舌が離れても、可愛い勃起ぶりを自力で維持している。

「や、やってくれるじゃない、秀平のくせに。んふぁ、次は私の番なんだから」

やられっ放しではいられない性分のお嬢様が、秀平の首筋から腕を解いた。食べ頃の肉体は少年とともに火照り、お湯に浸かっているせいで熱のまわりも早い。

「えっと……し、してもらえるんですか？」

何を、と明言するまでもなく秀平の意図は伝わった。

強がりみたいに偉ぶる沙織が、裸乳の上でもじもじと指を編む。

「出させてあげるって言ってんの。……何よ、イヤなの？」

牛乳色のお湯に隠れ、ソレはすでに脈打つほどの形になっていた。不埒にもおしゃぶりを期待していたせいもあり、胸がどきどきと高鳴ってしまう。

（沙織会長のフェラチオ……だめだ、ガマンなんてしてる場合じゃないぞ）

秀平はお湯から下半身を引きあげ、緊張しつつ、湯船の囲いに腰を下ろした。

遠慮する気持ちもあるものの、オチンチンは意気揚々と雄々しい姿を振り上げる。亀頭は包皮が届かない高さで膨張し、せっかちな疼きを漲らせていた。

「じっ、じゃあ、沙織会長。こないだみたいに……おくちでしてください」
見せる行為そのものにも興奮し、背筋がぞくぞくする。
秀平のペニスは、小柄な体型からは信じられないほど太く、逞しい。鍛え上げた筋肉のように芯が硬く、先端は肉厚のエラを張っていた。
「し、仕方ないわね、まったく……出さないと、もとには戻らないんでしょう？」
「え？　なんていうか、そ、そうですね。出さなきゃだめなんです」
彼女の勘違いにつけ込んで、つい射精を正当化してしまう。けれども卑怯な手も打ちたくなるくらい、沙織お嬢様の唇が恋しい。
ビキニスタイルの肉体が前のめりになり、湯船に裸の巨乳を浮かべる。
「彼女らしくしてあげるんだから、あっ、あんたも彼氏らしくなりなさいよ」
沙織は唇を開きかけては閉じる、往生際の悪い時間稼ぎをしていた。恥じらいと戸惑いを誤魔化しきれない、珍しく弱気な表情である。
（待てよ？　沙織会長の大きさなら、ああいうのも）
その下で揺れる、たわわな生乳が気になって仕様がなかった。
「あの……やっぱりフェラチオじゃなくて、パ、パイズリしてもらっていいですか？」
「ぱいずり？　何それ」
秀平の取ってつけたような注文に、沙織がきょとんとする。

「つまりえっと、オチンチンを……おっぱいで挟んで、扱いて欲しいなって……」
我侭気質の生徒会長に、我ながらとんでもないことを要求してしまっていた。それでも沙織のサイズなら可能であるはずのパイズリに、興味と期待を禁じえない。
「しごく？　挟んで欲しいわけ？」
いまひとつ理解の足らない沙織が、ずぶ濡れの巨乳をお湯からざばっと引きあげた。エロティシズムに満ち溢れる身体つきとは裏腹に、エッチの知識にはとことん疎い。
かろうじてブラジャーを引っ掛けた乳果実が、少年の股間を踏んづける。張りのある柔らかさが右からも左からも乗りあがり、オチンチンを包み込んだ。
たまらず秀平は、リードするにしては弱気な声をあげる。
「こっこれです！　沙織会長のおっぱい、はあっ、とてもずっしりしてて」
「重たいって言うの？　失礼しちゃうわね」
「そうじゃなくて、柔らかくって……す、すごく気持ちいいです」
沙織の手によって寄せあげられた谷間が、サオを搾るように圧力をうねらせた。ミルク風呂のぬめりが潤滑油となり、窮屈な乳谷をスムーズに貫通させてくれる。
亀頭だけは乳圧の波を脱出し、彼女の唇にも届きそうだった。快楽神経は赤腫れるほど剥き出しになっており、吐息さえくすぐったく感じてしまう。
（最高だよ、これ！　沙織会長のパイズリ！）

少年は感動のあまり震え、愉悦に浸っていた。メロン大はある白くて綺麗な巨乳が、赤黒いペニスを優しく包んでくれているのだ。

ビキニ姿の牛娘は雄々しい雁太を見詰め、不思議そうに瞳を瞬かせた。

「こんなに腫れちゃって、痛くないの？　んあふっ、秀平、それで？　しごくって、どんなふうにすればいいのよ」

「えぇと……マッサージするみたく、はあ、擦ってください」

その手が生乳を斜め下から圧迫し、谷間に柔らかさを集中させる。

曲線のついた双乳は勃起を磨きながら、苛烈に締め上げもした。さっきは外から触ったのと同じ感触に、こちらが呑み込まれるように感じる。

「こうかしら？　んふっ、あはぁ……おっぱい動かすなんて、ン、初めてだわ」

ふたつの巨乳は同時にひしゃげ、谷間の圧力に波を作った。一定のリズムで握り、搾るような刺激が、射精したがっている肉棒を巧みに扱く。乳房の重さそのものも柔らかさを有し、オチンチンを取り囲んだ。

挑発的かつ意地悪な上目使いで、牛おっぱいの沙織がなじってくる。

「秀平ったら、すごいカオよ？　えあふ、気持ちよくって、超幸せでしょ？」

「はいっ！　こんなのボク、はあ、クセになっちゃいそうです！」

内気な少年は喘ぐついでに即答し、獣欲を昂らせた。恰好などつけていられず、魅惑の

パイズリに涎まで垂らし、見入ってしまう。
「ほんとにボク、うあっ、沙織会長と一緒にいると、し、幸せで……」
プロポーズじみた台詞が無意識に口をついて出た。
沙織が照れの混じった優越感を浮かべ、はにかむ。上目使いは挑発的だが、赤らんだ表情はどことなく柔らかい。
乳果実は寄せつつ持ち上げられ、真っ白な谷間を狭めた。
「そうよ、あん、もっと私に夢中になりなさい？　そのためのエッチなんだから」
ビキニスタイルの肉体も火照り、流れる水滴が悶え汗に見えて艶めかしい。
勝気を装っているが、眉が吊り上がることはなく、目つきも穏やかだった。湿った吐息が怒張に「出して」と囁くようにまとわりつく。
（エッチしてる時の沙織会長って、ほんとに可愛いかも……）
性に無知だからこそ、ここまで積極的でいられるのだろう。自覚の有無にかかわらず献身的な奉仕ぶりは、秀平の男心と劣情を燃えるほどにそそった。
「さっき秀平、どんなふうに搾ってたかしら。……どお？　あふぁん、こんな感じ？」
ふくよかな巨乳が一、二のリズムで抱えられ、三のリズムで落とされる。
贅沢なマッサージに包まれ、肉棒は充血しすぎるくらい興奮していた。芯から過熱し、血液が循環するのをはっきりと感覚できる。

とば口が割れ、熱いガマン汁をぴゅっと噴いた。
「きゃ？　んふぁ、出たんじゃないのね。……まさかオシッコ？」
「違いますよ、カウパー腺液っていうのかな？　はあ、感じてる証拠なんです」
直接的な刺激のみならず、巨乳美女の肉感的な色気のせいで酔いがまわる。真っ白な牛乳風呂にはブロンドのおさげが広がり、きらきらと金色の光を放った。
高級感にも溢れる肉体が、温もった生乳をオチンチンに擦り寄せてくる。
ぬちゅぬちゅ！　ぬちゃっ、ぬちゃちゃ！
摩擦の回数をこなすにつれ、牛娘のパイズリはこなれたものになってきた。からかい上手なまなざしが、少年の苦悶をじいっと見詰める。
「んふふっ、ほぉら……正直に言ってみなさいよ。私のおっぱいで出したいですって」
「は、はい。沙織会長のおっぱいで、っはあ、イきたいです！　くぅう！」
さらに沙織は慎ましやかな唇を開き、雁太まで舌を届かせた。真っ赤な亀頭を叩くように舐め、痺れを直撃させてくる。
「イク？　えぁむ、どこにいくっていうのよ、しゅうへぇ」
「出すことを、うあぁ、一番気持ちよくなった時は、い、イクっていうんです！」
熱くぬめった舌がエラの右端をぴんっと弾いた。左側にはにゅるんと滑り込み、丁寧にお掃除してくれる。チンカスがあるかも、と教えたら怒るに違いないだろう。

「おっぱいでしながらでも……んぅふっ、れきるわね、あむぅぐ」
沙織の唇が亀頭を正確に捉え、しゃぶりついた。生温かい舌のうねりは、息継ぎのあとに必ず雁首まで降りてくる。
ぢゅちゅっ！　ずちゅっ、ずずず！
併せて巨乳を寄せあげ、谷間をキツキツに狭められてしまった。サオを搾られながら、さきっちょを涎たっぷりに舐めまわされる。
すべての刺激に射精を強烈に促され、たまらない。
「うわっあぁ、沙織会長！　こんなときに、っはあ、しゃぶられちゃったら！」
秀平は弱々しい恥声をあげ、全身をわななかせた。その声とは裏腹に勃起は逞しく、男らしさと獣らしさを誇っている。その先端にまたも唇が窄まりつつ下りてきた。
「きもひいいんれしょ？　はあぐっ、だっはら、しゅなおになりなさひ」
感じないことは許さない、といった口ぶりで、沙織は口淫奉仕を続行する。初めての時に比べて唇の窄め方が上手く、雁首の括れも確実に刺激された。
吸い出されたカウパーが彼女の唾液と合流する。
「けっこぉくるひいのよ、ふぇらひおっへ……んぉぐ、えれぇあっ」
せっかく端整な顔立ちは、ペニスを無理に頬張るせいで頬が伸びきっていた。切れ長の瞳も、上目使いだとぱっちりとつぶらな印象だ。

唇の心地よさに酔いしれ、舌を垂れている少年のほうが本当は犬らしいのかも。
沙織の頬は膨らんだり凹んだりすることで、口内圧力に強弱の波をつけた。フェラチオにパイズリと経験して、ペニスの扱き方を学習したのだろう。
涙を揺らめかせても、一途な瞳は男の子の感度のよさを見逃さない。
撮影にも余念のない秀平は、子犬のお耳を掴むことでなんとか腰を止めた。
「せっかくだし、はあ、沙織会長のプロモビデオも撮っちゃおうか。一旦抜くよ？」
狭い唇から雁太を引きずり出しても、沙織は舌でひたむきに追いかけてきた。エラ張りの亀頭を好んで舐めまわし、うっとりと微笑む。
「プロモって、えぁむ、ろおしゅるの？」
それこそ餌を求める犬そのもので、餌付けの効果は抜群だった。優しい手つきで玉袋も丁寧に押し揉み、刺激してくれる。
「じゃあ自己紹介してみて。何やってるかとか、カメラに教えるんだ」
カメラ目線で困惑しつつ、生徒会長はたどたどしく白状した。ほかの二台のカメラもプレッシャーになっているはずで、見るからに緊張している。
「に、二年三組の……っあふ、藤堂沙織よ。そ、それくらい知ってるでしょ？」
それでもペットにしては不遜で、秀平をご主人様として立てよう、というメイドなら当然の配慮もなかった。余計な一言を付け足し、自己紹介の主旨をはぐらかす。

こんな体たらくではフリルのエプロンが似合わない。
「だめだめ。沙織会長、ちゃんと『です』とか『ます』ってつけないと。あとボクのことはさ、『ご主人様』って呼んでくれると、プロモがもっと面白くなるんだけど」
彼女を服従させるため、秀平はいかにも乱暴そうな怒張を見せ付けた。それを舌が届かない位置まで後退させると、沙織の顔つきがモノ欲しそうに切なくなる。
口奉仕に躍起になっているのはむしろ彼女のほうかもしれない。
「ちょっと、しゅうへぇ？　とどかないったら……」
「ジャーキーが食べ足りないのかな？　だったら言うことを聞くんだ」
少年は上から目線で、恋人の魅惑的な水着姿を見下ろした。
紺色のスクール水着と純白のエプロンとのコントラストが、普段の藤堂沙織にはない純朴な素直さを引き立てる。
お嬢様気質で気位の高い牝犬は、肉棒を前にして再び唇を開いた。
「……二年三組で生徒会長の、藤堂沙織です。んふぁ……ろぉ、これふぇいい？」
こちらからも腰を進めると、唇とオチンチンが合流する。
「これでいいですか、だろ？　はあ、よしよし」
「ひぃれすかっ、あもぉ、ン！　んむぅ……ごしゅひん、はまぁ」
その一言が皮切りになったのか、生徒会長は今までになく従順に肉茎を頬張った。男の

子のもっとも正直で野蛮な部分に、舌も絡ませてちゅぱっと吸い付く。
ずちゅちゅっ、ぎゅる！　ぢゅぷっぢゅぱ！
睫毛の長い瞳は、秀平の苦悶を勃起ぶりと見比べ、口奉仕の手応えを確かめているようだ。熱い吐息も混じった温かい舌が、裸の亀頭を包み込む。
「らめなの、これぇ……ぇぁふっ、秀平のちんぽ、ぷぁ、舐めるのクセになっひゃう」
さらに沙織はピストンを催促するみたいに唇を前後させた。吸引による締め付けが雁首を小刻みに摩擦し、ペニスの芯を痺れつかせる。
「ご主人様のチンポだよ、沙織会長！　はあっ、そ、その調子で続けて！」
年下のご主人様は撮影も疎かにして、腰を前後に動かし始めた。肉棒でメイドの唇を荒らし、強引に舌をもつれさせる。
「んぁあむっ？　ごしゅじんさまの、おあぁ、ち、ちんぽぉ……」
自分自身に暗示をかけるかのような声色で、沙織は一心にペニスをしゃぶっていた。上目使いはいつもの挑発ではなく、奉仕精神に満ちている。
「ちゃんと言うこと聞いたら、っうくう、これからもジャーキーあげるからね。ほんとは食べたくてガマンできなかったんでしょ？」
「んぇはあ、いわないでえ？　えむぉお、ほんとに、ひゃべたくなっひゃうからぁ」
ペットの自覚も出てきたようだ。牡肉のジャーキーを頬張り、瞳を蕩かせる。

（沙織会長って、こんなカオもできるんだ？）

フリルの装いともマッチし、水着姿のメイドに世話してもらっているみたいだ。秀平は昂る気持ちと逸る気持ちを抑えながら、腰の動きを遅くし、撮影に集中した。

沙織の唇がエラで引っ掛かり、白く濁った涎を噴く。

「がんばる……ぇはあ、がんばりましゅ、から……オシリのはもぉ、許しへ？」

新米のメイドはもどかしそうにスクール水着をくねらせ、尻尾を振った。尻穴の太筆を床に垂直に押し付け、自慰的な快感まで求めてしまっている有様だ。

健全なスクール水着も可憐なエプロンも、いやらしい肉体の発情をまったく誤魔化せていない。首輪つきの牝犬の表情は、チンポへのキス奉仕に半ば陶然としていた。

汗だくの少年も淫らなムードに呑まれ、ぼうっとしてくる。

「スピード上げてくぞ？　っはあ、そうそう、おくち開いてて！」

こうなっては遠慮など考えていられない。舌の絡みつくうねりを求め、秀平はピストンのペースを少しずつ上げていった。

「ボクのチンポが美味しい、ってカオだよ。沙織会長」

唇の中をかき混ぜられる沙織が、ほっとしたように表情を和らげる。

「あむぅうッ！　らっへ、しゅうへぇの……んぐっ、ごしゅじんはまの、ひんぽ、すろくあちゅくって……らめなの、んあっむ、わたひ、ちんぽ好きにされひゃう！」

チンポ、チンポと低俗な言葉を連発するだけあって、顔が真っ赤だ。それでもご主人様の情熱的なストロークを受け止め、唇を上手に窄めてくれる。
ぢゅぶっ！　ぢゅっ、ぢゅぶぶ！　ぢゅぽっ！
むず痒くてならない雁太に、包み込むような摩擦が行き届いた。舌の柔らかさと温かさがダイレクトに溶け込んでくる。
「沙織会長って、はあ、メイドの才能あるよね。くうっ、すごく可愛くって！」
専属メイドへの愛しさも込み上げ、腰を返すついでに頭を撫でてやりたくなった。
「あむぅ、か、かわいい……れすか？」
よしよしと撫でると、沙織の顔つきがより優しいものになった。可愛いと言われたことがよほど嬉しいらしく、どんどん積極的になってくる。
牝犬メイドはイラマチオを受け止めつつ、ご主人様のお尻を愛しそうにさすった。仕草がすっかり愛玩動物そのものになっており、猛烈な獣欲を禁じえない。
「ろぉれふか……んちゅっぱ、っへぁ、きもちいいれしゅか、ごひゅじんはまぁ？」
舌は旋回しつつ鈴口と雁首を往復し、秀平の急所に熱い快感を染み込ませた。授業時間中とはいえ、ご主人様は思わず恥声を張り上げてしまう。
「はあああっ！　き、気持ちよすぎです……いや、上手だぞっ」
意識せずとも腰が勝手に動き、沙織の唇を貪った。疼いてならない怒張が柔らかい舌の

上でのたうつ。悦痺れは股関節まで伝わり、立っていられるのが不思議なほどだ。
ぢゅるるっ！　ちゅぱ！　ずちゅっぱ！
唾液でぬめった唇は肉太を締め付け、熱烈なキスを奏でた。
「あもぉ、ご主人様の、ぅあむ！　びくびふっれ、ンッ、ひちゃっへますぅ」
高飛車なお嬢様とは思えない、健気なまなざしが少年の下劣な意欲を昂らせる。丁寧口調が舌足らずなのも、一生懸命にオチンチンをしゃぶっているから。
ご主人様の勃起を咥えながら、沙織はしおらしく蹲っていた。尻穴で筆を立て、かろうじてバランスを保っている。
（これが沙織会長？　ホンモノのメイドさんみたいだよ！）
おしゃぶりさせられることで、彼女のほうも昂っているのだろうか。
男の子の性的興奮は最高潮に達し、身体中が熱化した。
「やばいよ！　っはあ、これもう！　出しちゃうからね、メイドさんのおくちで！」
ペットとの卑猥なキスが、股間で生じた高揚感を膨張させていく。
秀平はカメラ越しにメイドの口奉仕と、ふくよかな胸の谷間を覗き込んだ。スクール水着にエプロンが重ねられていることで、かえって女体曲線の流麗さを想像させる。
「えあぉむ、またぶっとく……どぉぞ？　れあっ、おくちにおだひになっへ」
沙織は美味しそうにチンポを頬張り、味わっていた。飼い犬のお耳もさまになり、首輪

の拘束も相まって、まさしく秀平だけの忠実なペット。
ぢゅぱっ！　ぢゅぢゅっ、ぢゅるるるっ！
秀平の腰に合わせて彼女も首を動かし、立て続けに吸い音を鳴らす。
「えんりょなひゃらず、うぇおぉ、あむう！　しぶとしゅぎ、れ、れすよおっ？」
スクール水着さえ扇情的に着こなす肉体は、一回の吸引ごとに弾みをつけた。ブロンドのツインテールをまとった巨乳が、とめどない涎の受け皿となる。
「もっとして！　沙織会長、ひはあっ、じゅるって！　そ、それいい！」
秀平はセックスばりに腰で暴れ、沙織を翻弄した。慎ましやかな唇を射精の道具にするプレイなのに、せめてもの愛情表現がほかに思いつかない。
（沙織会長にしゃぶらせまくるんだ、もっと！）
少しも遠慮しない自分に驚きつつ、恋人の唇に躍起になるほど執着する。
「ぢゅるっへぇ、こおれふか？　あぅうぐ、えふっ、んぢゅぅうっ！」
唇と舌が織り成す、「窮屈な出入り口」と「ぬめったヒダ」というふたつの感触は、熱いオマ〇コの中さえ連想させた。
さすがに息が苦しくなってきたのか、沙織の瞳が涙っ気を多くする。育ちのよいお嬢様には不似合いな鼻息がふんふんと、サオに当たってくすぐったい。
「しゅ、しゅうへえっ？　んぉぐ、こんな、ぉおへ、おといれみたひにしないれえ！」

「トイレ……そうっ、トイレだよ！　沙織会長のおくちは、はあ、精液専用の！」
恋人の唇を便器扱いしてしまえるほど劣情が燃え上がった。
わんわんのお耳を掴んで、カメラも近づけ、反復運動のペースを跳ね上げる。沙織の唇はサオの半ばを越えて下り、亀頭はおそらく咽にぶつかっていた。
ぢゅぽっ！　ぢゅぽっ、ぢゅぽ！　ぢゅぽ！
「ふもぉ？　んれおぇ、しゅうへ、か、かげんふぃて！　おふちめくれる！」
熱心な吸い付きが抜き挿しの猥音を奏で、涎を噴くようにまた零す。
牝犬より遥かに獣じみているオチンチンが、尿道に熱感を閃かせた。カウパー腺液が先走り、男の子の股間をぶるつかせる。
腫れあがった亀頭は痛いほど膨張し、舌に包まれていないと狂おしい。その先端が衝動に駆られ、秀平の意思とは離れたところで脈を打った。
「もうすぐ、でっ、出る！　出ちゃうよ、沙織会長の、っふあ、おくち便所で！」
「んあむっぐ、もうひゅこし、はぢゅっ！　おぉろ、ゆっくりっへぇ？」
首輪つきの牝犬は飼い主にお耳の片方を掴まれ、ろくに後退もできない。スクール水着のラインをのけぞらせるのが精一杯で、可憐な唇はフェラチオを余儀なくされていた。
太さのあるピストンが唇を引っ張りまわし、生徒会長の端整な美貌をひょっとこみたいに伸ばしてしまう。上目使いの瞳に溜まった涙がいじらしい。

「すごくいいカオだよ、沙織会長……っはあ、もっとぺろぺろして！」
「だひゅの？　えぁお、わたひの、れぉ？　おくちれ、はぅぐむ」
頭の上から命令すると、それを励みにするかのように沙織が唇を窄めた。頬を凹ませて雁太を圧迫しながら、涎たっぷりの舌をのたくらせる。
そうやって頬を駆使しているせいか、顔つきには締まりがなく、男の子の雄々しい勃起ぶりに見惚れるかのようだ。ピストンを受けて深く咥え込み、においまで嗅ぐ。
「ごひゅじんはまの、っえぅぐ、びくびふっれ……はしゅ、ン、だしたらっへますぅ」
メイドならではの丁寧口調で、舌の優しい動きも織り交ぜて。
「そっそうだよ！　出したくってもう、うああっ！　イクよ、イっちゃうぞ！」
股間の底で熱量が沸騰を始め、みるみる物理的な圧迫感を膨らませた。撮影どころでもなく、秀平は夢中で恋人の唇をかき混ぜる。
水着姿のメイドも軽やかな腰つきで、お尻の筆を振りまくった。蒸れた肉体を小気味よく弾ませながら、肉太のジャーキーをしゃぶり尽くす。
「イってくらはぃ、ぇむう、ごしゅじんはまぁ！　おぉぐぅ、わたひのおくひにっ、みるく、ぷあっは！　ちぃ、ちんおみるく、おだひになっふぇ！」
切ないまなざしで少年をぞくりと昂らせ、ラストスパートを催促する。
腫れぼったい亀頭を吸われつつ、舌で鈴口を弾かれた。その刺激がとどめとなり、快楽

電流を迸(ほとばし)らせる。
年下のご主人様は、雄叫びにしては情けない声をあげた。
「うあっあぁあああ？　イクっ、沙織会長、ボク！　でひゃうぅぅぅうううッ！」
だがペニスは野獣のごとく吼え、驚くメイドの唇に、勝手な欲望を吐き散らす。
どびゅううっ！　どびゅっびゅ、びゅるるる！　びゅるびゅる！
「んむぉおおおおおおッ⁉　おおっご、えむっ、ンーッ！　ンンンンン！」
子種は尿道を次々と駆け抜け、沙織のおくちに飛び移った。甘美な放精感が深い恍惚をもたらし、秀平は無自覚に笑み崩れるほど、淫らに陶酔してしまう。
沙織はらしくもなく涙ぐみ、ご主人様の熱いミルクを頬いっぱいに含んだ。
「おあぁおっ、うぐぅ！　ごしゅじんはまの、あえぇ……んぷあ、ろんなにたふさん」
入りきらない分が溢れ、スクール水着へと垂れ落ちていく。それでも唇を窄め、吸い上げようとする頑張りが心にくい。
そんな彼女の口の中に、オチンチンは好き放題に子種をばらまいた。
びゅるるるっ！　びゅく、びゅくびゅく……。
忠実なペットであり従順なメイドでもある、年上のお嬢様の唇を便器扱い。背徳感こそあれ、優越感が上まわり、男の子の気分をいっそう盛り上げる。
「沙織会長のおくち、ぅはあ……もうボク、これ、やめらんないよ……！」

エクスタシーは味わい深く、身体中を快美感に支配された。オチンチンへと捧げられたキスは、三台のカメラが一部始終を捉えている。

「んむぉお……とってもあちゅいれす、ぷあっひぁ」

生徒会長は学院でトップの立場にもかかわらず、年下の男の子に従い、熱心にチンポを頬張っていた。陶然とした顔つきで、ご主人様の悶絶に見惚れている。メイドの振る舞いが完璧であることに自覚はないのかも。

そして咽の奥で、ごっくんと。

「ごしゅじんひゃまの、ン、みるくぅ……んぐっ、うぅぐぅ！」

さも美味しそうに精液ミルクを食道へと落としていく。

「うあぁ、沙織会長？　そんなに吸われたら！」

射精が終わったかどうかも感覚できない剛直を、雁首のあたりで吸引された。

肉棒をずるりと引き抜いても、あーんと開かれた唇の中にはまだ白濁汁がなみなみと溜まっている。咄嗟に秀平はカメラをまわし、質問も投げかけた。

「ボクのチンポミルク、美味しい？　……もちろん美味しいよね？」

美味しいと言って欲しくて、返答まで押し付けてしまう。

「はい、とっても……や、やだ、わたし……こんなつもりじゃなかったのに、さっきからヘンになっひゃってるぅ」

ふたりとも悦痺れから逃れようがなく、肉体を真っ赤に熱化させた。沙織の巨乳も香汗でべとつき、大玉の柔らかさがてのひらに吸い付く。

「そんなふうに、ひぁん、おっしゃらないでぇ？　だ、だめぇ、せっくすするだけの、へぁぁ！　いきものになっちゃいそぉです！」

バニーガールの弾むようなダンスは少年越しにベッドを軋ませた。ご主人様に体重をかけて跨るという、礼儀知らずの体勢で、リズムよく腰をくねらせる。

窓の向こうでは野外ステージでライブが始まり、歓声から熱気が伝わってきた。

（沙織と……生徒会長と、セックスしちゃってるんだ！）

けれども学園祭の責任者は、生徒会室にベッドまで持ち込み、ご主人様とのセックスに耽っている始末。騎乗位で快感を得ることにも慣れ、腰の反応がよい。

「おくにあたって、やんっ、あたっちゃいます！　ご主人様ぁ！」

少年の膝を手すりにして、膣穴をエラで穿り返すことに浅ましいほど没頭する。ウサギのお耳をお辞儀させながら、沙織は惚けた顔つきで涎を垂れた。

肉穴が勃起を呑み込む動きに体重がかかり、濁った愛蜜が弾け飛ぶ。

「生徒会長が、っはぁ、こんなとこでエッチして！　沙織、ふう、とんでないぞ？」

「だって、こんなに気持ちいいなんて、っぁん、知らな……えぁぁあっ？　ぞ、存じ上げず、私ばかり気持ちよくっへ、せえ、せんえつしごくです！」

しこった乳芽を捻ってやるだけで、利口なペットは言葉遣いをより洗練させた。
ご主人様にも気持ちよくなって欲しいのか、単にチンポを味わいたいだけなのか、膣の締め付けを強くする。敏感な亀頭は粘膜襞の荒波から脱せられない。
「もっと脚を広げて、沙織！　もっと激しく、はあ、びりびりきてる！」
快楽神経を淫猥な摩擦で扱き抜かれ、秀平ものたうつほど悶絶した。ただでさえ前立腺を刺激され、異常な勃起ぶりに苦悶しているのに、それを搾られてはたまらない。
バニーガールは片方ずつ膝を浮かせ、M字開脚のポーズになった。それこそ本当にうさぎ跳びするみたいに跳ね、お尻を急降下させる。
「こおですか？　んあっあぁ、オマ〇コに勢いが、えはぁ！　つきすぎて！」
そしてお耳が後ろに倒れ込むくらいにしゃくりあげ、悩乱を極めた。
フェラチオが唇を捧げる奉仕とするなら、騎乗位セックスは肉体のすべてを捧げる最高の奉仕かもしれない。ご主人様のために、という健気な頑張りが男心をそそる。
秀平も彼女のために感じてやらなければ、ご主人様失格だ。
「いいぞっ！　もっとずぼって、くうっ、オマ〇コでチンポを擦りまくるんだ！」
愛情を上乗せした劣情を燃やしながら、生乳を飽くことなく揉みしだく。
ふたりは野外ライブよりも激しい運動を止められず、競いあうように悶えた。騎乗位であっても彼女だけに頑張らせるのではなく、秀平も勃起の角度を変え、導いてやる。

「いっちばんおくに、へぁえぅ、深すぎますよお、ご主人様ぁ！」
「当たってるのかな？　沙織の子宮に、っうあ、当たってるんだよね！」
沙織はこれみよがしに腰をくねらせ、子宮への命中の精度を確実に上げていった。開脚姿勢のせいで太腿の網タイツが伝線し、白い肌を水玉模様みたいに露出させる。
「すごいカッコ……っはあ、可愛すぎるよ、ウサギさん！」
その中央では肉棒がバニースーツの股脇に飛び込み、ご主人様専用の性便器をほぐしていた。肉厚のエラが膣圧と抵抗を生じ、雁首を限界まで伸ばす。
ぐちゃっぬちゃちゃ！　ぐちゅっ、ぬちゅぬちゅ！
ぬかるんだ粘膜穴は沙織の迎え腰によって、手前に運ばれ、秀平の股間に恥丘を乗りあがらせた。跳ね返るように後ろに引き返したら、またすぐにお尻をグラインドさせる。
ウサギのお耳はぴょんぴょんと跳ねて愛らしいのに、コスプレから食み出して火照った肉体は汗みずくで、いやらしい。
「こんなのイっちゃいそおなのに、えふっあ、まだ……ああっ、また気持ちよく！　なっひゃうんれす、これが、へあぁ！　ちんぽせっくしゅ！」
呂律もまわらない調子で、沙織は緩みっ放しの唇を舐めまわした。しかし零れそうな唾液をまったく回収できていない。
生徒会長の腕章など巨乳で押しのけ、セックスの快楽に悦がる。

「ボクもだよ、沙織と、うあああ！　オチンチンがすごくなってる！」
自分より背の高いウサギさんと一緒に、少年も涎を垂れていた。濡れそぼったオマ〇コに自慢のチンポを咀嚼（そしゃく）され、衝動的な昂りを禁じえない。
「沙織はボクのだぞ！　ぜんぶ、おくちもオマ〇コも！　ボク専用だからな！」
「はいっ！　ご主人様の、えぁふう、おっ、おトイレとして！　ご活用ください！」
気高い生徒会長を上に跨らせ、踊らせている優越感も、性的興奮を燃え上がらせた。無遠慮に巨乳を掴んで引っ張り、よりリズミカルな騎乗位セックスを催促する。
バニースーツのV字カットは粘っこい淫液にまみれ、網タイツにも染みていた。本能的な中毒をもたらす甘酸っぱいにおいが、また一段と濃くなる。
自分だけ楽に寝そべってなどいられない。
「気持ちいいよっ、沙織のヌルヌル！　うあっあ、ま、また締まってく！」
秀平からも腰を返し、バニーガールの股間を突き上げた。ずぶ濡れの肉穴に剛直が勢いよく飛び込み、彼女の重心に雁太を激突させる。
狙うはおへその下あたりにあるはずの、子宮孔だ。亀頭を押し込むと、サオが沙織の体重を支えきれずにひしゃげそうになる。
「へあああああん！　そこぶつけちゃ、あん！　らめですぅ、ごしゅじんさまぁ！」
子宮を打たれるたび、沙織は四肢に波のような痺れを行き渡らせた。それでも一心不乱

に腰を振り続けようという、ひたむきな奉仕精神が男心を煽り立てる。
単に気持ちいいから止められないだけ、かもしれないけれど。
「さてはとまんないんだね、ウサギさん？　ぅはあ、スケベでエロい生徒会長だなぁ」
「お、おっしゃらないで……へぁんっ、けいべつしないで、ひはっあぁ！」
言葉で辱めてやると、生徒会長の瞳が多感な涙を浮かべる。
サオでは苛烈な締め付けと淫液のぬるつきが、剥き出しの亀頭ではさらに肉襞のうねりも感じられた。快楽神経は痺れで焼かれ、過熱する。
ずちゅずちゅっ！　ぐちゅちゅ！　ぬちゃっ、ぐちゃ！
とりわけPスポットに命中した瞬間の、沙織の悦がりぶりが狂おしい。バニーガールはブロンドのおさげを振りまわし、秀平の手から巨乳を剥がすほどのけぞった。
「ああっ、あたっへるぅう！　すごくしびれるとこに、えひぃいっ、ち、ちんぽぐりぐりされるの、好きなんです！　愛しへますからあ！」
恋愛対象にもなるらしい快楽は、ダンスをますます白熱させた。黒ラメのボディスーツが生乳の下でくねり、太腿の網タイツを引っ張りまわす。
「ほら沙織、手をこうすれば、ぅくう、もっと激しく踊れるだろ」
「はい！　んはっ、失礼します、ご主人様……えへぁ、いい！　いいんれすぅ！」
沙織はご主人様と手を繋ぎ、暴れ馬にでも跨ったかのように肉体を弾ませた。灼けた吐

息が空気中で濃度を増し、男の子をくらくらさせる。
お尻が急降下するたび、肉棒は根元まで締め付けられ、牽引された。濁って泡立つほどかき混ぜられた愛蜜が、玉袋を濡らし、オオカミの尻穴にも熱く染みてしまう。
「これ絶対、はあっ、メチャクチャ出るよ！　沙織のオマ〇コに！」
「お出しになって！　ミルクっ、あぁん！　おま〇こに飲ませてください、れひゅう、ごしゅじんさまの、おひんぽ、ちんぽのあかちゃんミルク！」
ふたりは繋いだ手を固くして、肉体の喘ぎを競った。お互い汗みずくの肌を股間だけ集中的かつ積極的に擦り合わせ、甘い痺れを交換する。
ふたつ年上の我侭な恋人は、セックスというスキンシップそのものに陶酔しているようだった。唇をだらしなく広げ、大玉の涎をぶらさげている。
「ごしゅじんはまに、えあぁふ！　おまんこれ、して差し上げられるなんへ……さおりはとっても、んひぃ！　超しあわせなウサギれすぅ！」
上気しきった顔つきは笑みを含めて蕩け、玉の汗を浮かべた。飼い主に見惚れてばかりの、甘えん坊のまなざしが、男の子に野蛮な衝動をもたらす。
「抱っこしてあげるよ、沙織！　掴まってて」
秀平は生殖器を繋げたまま起き上がり、彼女の太腿を両方とも抱きかかえた。先日のアナルセックスと同等か、それ以上の力を発揮し、バニーガールを窓際へと運ぶ。

「ご主人様？　んふあ、だめです！　下から見られちゃいます！」
「大丈夫だよ、みんなライブに夢中だし。はあ、少しだけ窓を開けて」
窓の下にはグラウンドが広がり、大勢の客が野外ステージを囲んでいた。十センチほど窓を開けただけでも熱気が伝わってくる。
ライブはアンコールの斉唱を受け、メタル調のイントロを流し始めた。生徒会室で大声をあげたところで、群集には聞こえないだろう。
沙織が戸惑いつつ窓の残りも開け放ってから、力持ちの男の子にしがみつく。
「……あ、あの、ご主人様？　私にもアンコールを……」
騎乗位のように自分本位で快感を貪ることができず、ご主人様に頼るしかないのだ。あと少しで果てるところだったのか、おねだりの声色は切ない。秀平の胸元に汗みどろの巨乳を押し付け、煩悶とする。
「ニンジンのおかわりが欲しくなっちゃった？　仕方ないなあ、はあっ、沙織は！」
キスも可能な距離で見詰めあいながら、ご主人様はオオカミの尻尾を振り出した。前立腺を刺激されていきり勃つチンポで、ウサギさんの子宮に襲いかかる。
「あっあはあん！　ご主人様、も、もっと！　アンコールしてくださいっ！」
「もちろんだよ、はあっ、これで出すからね！　オマ〇コに中出しだぞ！」
秀平の暴れる腰に揺らされ、沙織の乳果が転がった。その先端で桜色の突起がふたり分

の涎を浴び、ひくひくと疼く。
前のめりになって抱きついてくる恋人を支えながら、少年もセックスに汗を流した。
ぐちゅっぬちゃ、ぐちゃ！　ぬちゅぬちゅぬちゅ！
ひしめく肉襞が剛直を迎え入れ、膣の奥まで届かせる。ぬめった粘膜が真っ赤な亀頭を包み、エラの生え際にも淫熱を染み込ませた。抱き締めた彼女の中にいるという、どちらが内側なのかわからない抱擁感が心地よい。
沙織は腕だけでなく脚も男の子に巻きつけ、網タイツを擦りつけてきた。抱っこされるのがお気に入りらしく、舌を伸ばし、キスの続きもおねだりしてくる。
「こっちもアンコール、っんあむ、さへてくらはい……ンッ、しゅうへ、おぉあむ」
「ボクのことは、んぐぅ、そうじゃないだろ？　はあっむ、さもないと……」
溜まった唾液をぬちゃぬちゃと舌で交換しつつ、秀平はグラインドを大きくした。大波に煽られる小船みたいに、腰の軌道が弧を描く。
沙織のお尻も太腿をバネにしてよく弾み、肉棒の抜き挿しに瞬発力をつけた。網タイツがぴりぴりと伝線しようと、構ってなどいられない。
「あふっうぷ、ひああ！　ご主人様のおちんぽ、あんっ、超素敵です！」
ウサギのお耳が秀平の耳元で跳ねまわる。
発情期のバニーガールは極太のニンジンに淫液を垂れ、その雄々しさを吟味していた。

産み落としそうになったチンポを根元まで包んでは、愛しそうに食い締める。
「沙織のオマ〇コも、はあ、超いいぞ！　ぬるってのが！」
膣の疼きがはっきりと感じられた。動いているのはペニスのはずなのに、むしろ肉洞に吸い込まれては吐き出されるかのようだ。
ご主人様が担いでやっている太腿も、明らかに牝痺れを帯びている。
秀平も下半身を強い痺れに襲われ、立っていられるのが不思議なほどだった。
「おくに当てると、ボクも！　いいっ、気持ちいいよ、沙織！」
Pスポットに命中すると膣粘膜が伸びきり、苛烈な締め付けを肉棒の全体に行き渡らせる。これが癖になって闇雲に繰り返すうち、興奮は最高潮に達しつつあった。
沙織もおさげもろとも腰を波打たせながら、ウサギのお耳を上機嫌に振りまわす。
「あぁん、ご主人様のおちんぽ、ひあっあぁ、なかで出したがってます！　はやくお出しに、んあ、なっへぇ？　わ、わたしもお！」
精一杯の笑みは恥じらいと嬉しさで満たされていた。彼女のほうもセックスの虜どころか、中毒になっているのは間違いない。
ずちゃっ、ちゅぱん、ぢゅぱんっぢゅぱんっ！
互いに土手を土手で叩く勢いになり、発情汁の泡が弾ける。
沙織の膣穴は子宮に向かってうねり、今にも収縮するような気配だ。狭さを無理やり突

破する肉太も、熱量をみるみる膨張させる。
オチンチンが感じやすくなればなるほど、焦燥感に突き動かされた。
「うあぁっ、イク！　イクよ、はあっ、沙織のなかで！」
「ご一緒します、いひっぁぁ、ご主人様！　わたひも、いいっ、超イっちゃいます！」
沙織も発作に陥り、マラソンじみた息遣いで熱烈に悦がり狂う。柔らかな巨乳が秀平の胸を転がり、甘い香汗を分けてくる。
お互いキスの意欲があっても、舌の先をちょんとつつき合わせるだけ。しかし生殖器官の結合は深く、引き抜く動きのたびに淫蜜が滴り落ちた。
野外ライブなどそっちのけで、ご主人様と牝ウサギは吐息の熱さを求めあう。
「しっ締まる！　沙織のすごい、キツキツで……っはあ、はぁはあ！」
窮屈な窄まりを根元まで届かせながら、秀平は生理的な胴震えを起こした。彼女への気持ちを節操なしのオチンチンに託し、子宮に中出しを予告する。
「イクぅ！　ごしゅじんさまと、っあん、いっしょに！　イきそうれ、えっあぁあ？」
それを受け、バニーガールも息を合わせて悦がった。黒ラメのボディスーツから汗だくの肉体が飛び出すように暴れる。
網タイツも滅茶苦茶に裂け、温もった柔肌に直接触れることができた。誰も見ることのない最高のライブは、サビに入り、矢継ぎ早なリズムを奏でる。

ぱんぱんぱん！　ぱんぱんぱんぱんぱん！

言葉で「好き」と伝えるよりも情熱的に気持ちをぶつけあえる、ふたりだけの生チンポセックスだ。みっともない喘ぎを歌声にして、デュエットの一体感に陶酔する。

股間で膨らみつつあった圧迫感が肉棒へと込み上げた。

「ミルクの時間だぞっ、沙織！　ボクの沙織、さおりぃい！」

「ください！　ちょおいっぱい、えひぁあ！　おまんこにだひてえぇ！」

怒張が肉襞をかき分け、大急ぎで子宮に口付けする。同時に性粘膜がペニスを根元まで包み込み、搾ってくれた。

どびゅびゅっ！　どびゅっ！　びゅびゅ！　どびゅどびゅどびゅ！

痺れつく前立腺をポンプにして、膨らみすぎたチンポが溶けるように爆ぜてしまう。甘美な放精感は瞬く間に全身に広がり、頭の中まで真っ白に満たした。

「あああああッ？　沙織、出てるよ！　でまくってるぅうううううう！」

腰の動きが止まっても、オオカミの尻尾を振ってしまう。

牝ウサギもソプラノでいななき、背中からお耳の先までを弓なりに伸びきらせた。

「れてるぅ！　ごしゅじんさまの、みっ、みるひゅ！　あかちゃんがぴゅっへ、わたしのおなかに、あへっ、あへぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ――――――！」

濡れそぼったマゾ穴が奥にうねりつつ緊縮し、種ミルクをがぶ飲みする。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

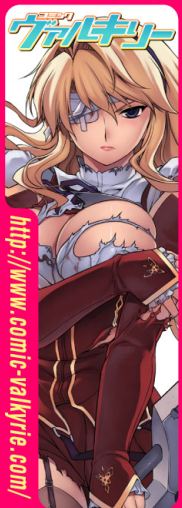
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁でではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!